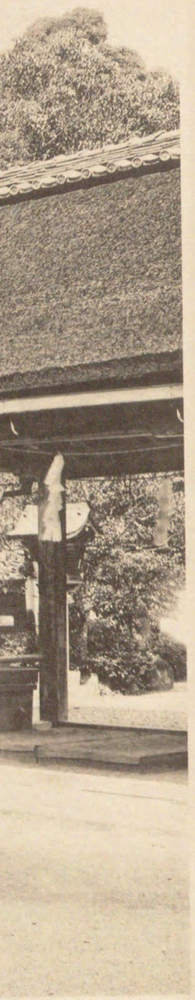
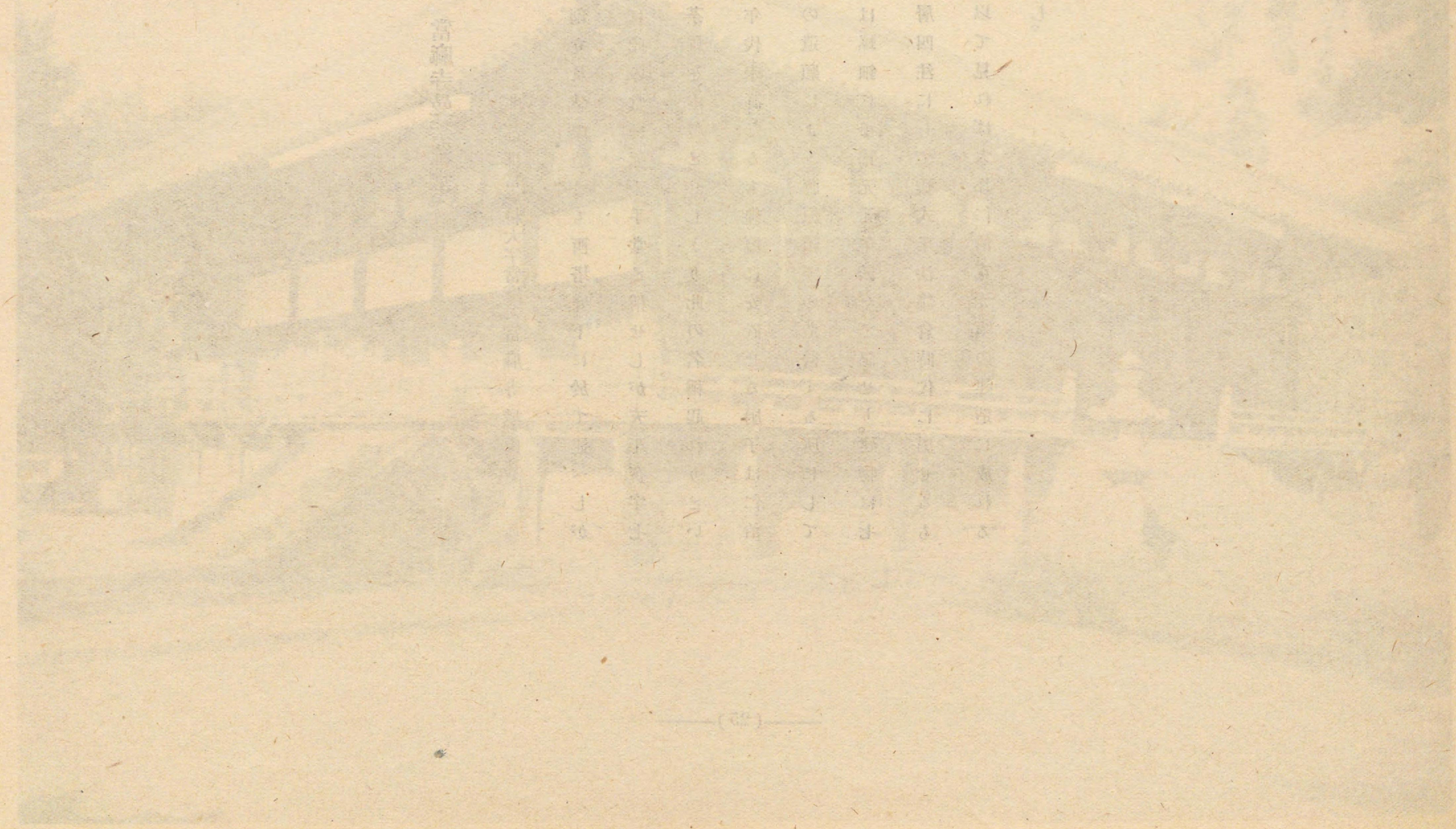


石上神宮拜殿。

山邊郡丹波市町大字布留　官幣大社石上神宮境内。

石上神宮は　崇神天皇七年の鎭座に係り布都御魂の御劍を祭る、拜殿の創立年代未詳なり。現在の建物は社傳永保元年の造營と稱すれども、其の樣式鎌倉時代の中期に屬するものゝ如し、七間四面單層檜皮葺なり。



當麻寺曼荼羅堂。

北葛城郡當麻村大字當麻　當麻寺境内。

當麻寺の創立及び遷造とも西塔條下に於て述べしが如し。寺傳に此の堂は元千手堂と稱せしが天平寶字七年藕糸曼荼羅を本尊とせしより此の名稱起れりといふ。再建の年代未詳なるも佛壇に安置せる厨子は仁治三年賴朝の遺願により藤原賴經の造營する所にして又佛壇には螺鈿にて寛元元年云々と記せり。建物は七間六面單層四注にして樣式手法鎌倉時代に屬せるものゝ如し。

興福寺東金堂及五重塔。

奈良市登大路町　興福寺境内。

東金堂は養老六年、五重塔は天平二年の創立に係る、爾後共に寛仁、永承、治承、延文及應永の火災を經、應永三十三年に到りて建立せられたるものなり。

塔は石口より相輪頂上迄百六拾五尺餘、雄大整正、其の高さに於ては東寺の塔に亞ぎ、本邦第二の高塔たり。

東金堂は七間四面單層四注にして外觀比較的簡單なれども全體として、奈良朝時代の建築に室町時代の手法を用ゐたるものにして、喜光寺本堂（生駒郡跡村）と與に其の創立の時代を語る貴重なる建築なり。

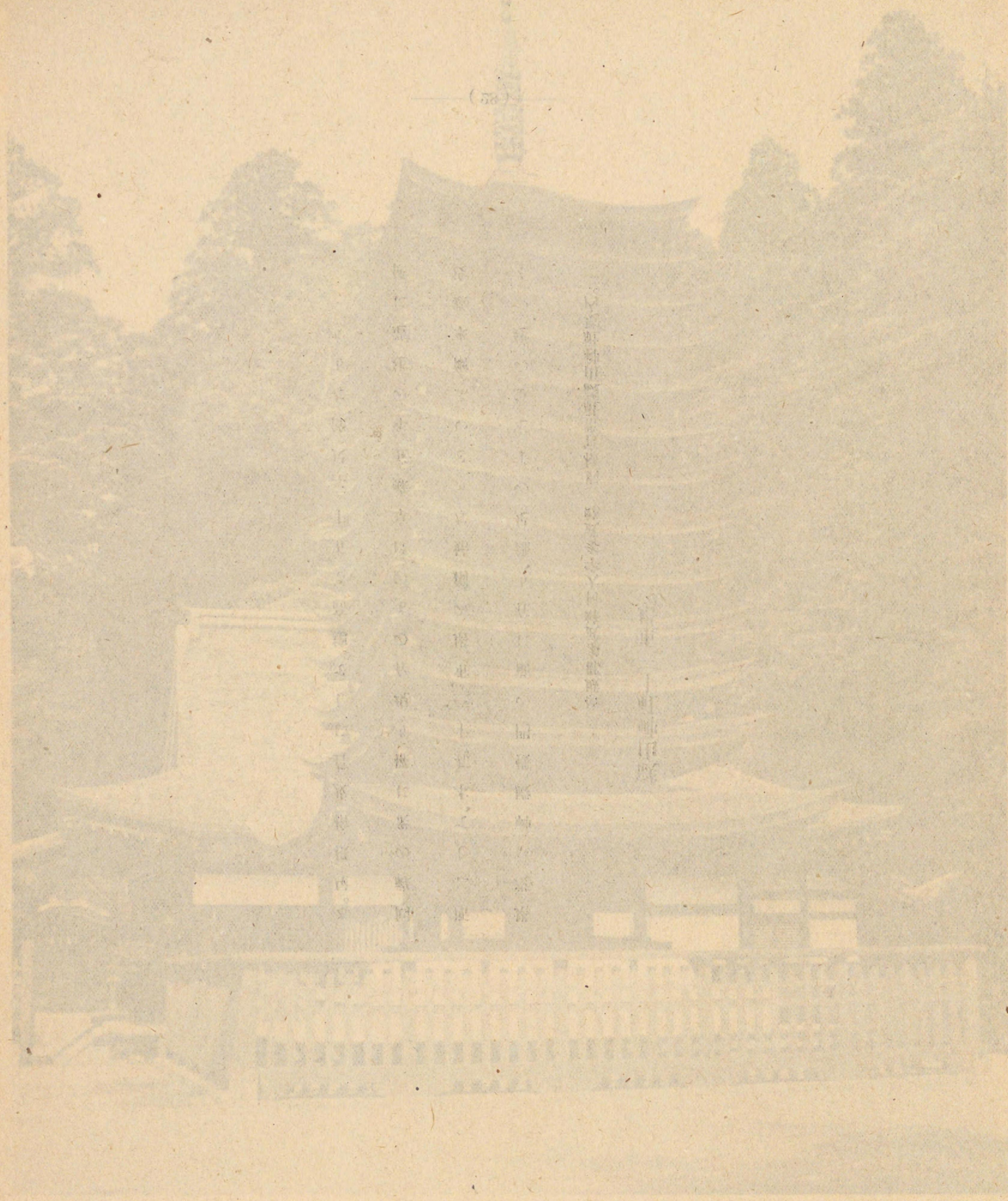
天台の鎮守神の社殿内に並立する大小七基の石燈籠

古天台の南大門

法隆寺南大門。

生駒郡法隆寺村大字法隆寺　法隆寺境内。

法隆寺西院伽藍の表門なり。推古天皇の御宇他の諸堂塔と同時に建立せられしものにして元と中門に近く建ちしが後現位置に移せしといふ。永享六年正月焼失同十一年再建せしもの即ち今の建物なり、單層八脚門としては大さ東大寺轉害門に亞ぎ細部の手法頗る觀るべきものあり。



談山神社十三重塔。

磯城郡多武峰村大字多武峰　別格官幣社談山神社境内。

塔婆は神殿樓門の前に在り、鎌足の子定慧の建つる所にして、本邦十三重塔の創始なりといふ。爾來數度回祿の災に罹り現存のものは享祿五年の建造に係る。屋根檜皮葺にして總高さ五十三尺餘なり

春日神社中門及東西廊。

奈良市春日野町　官幣大社春日神社境内。

中門一に樓門と稱す、社傳によるに此門元とは鳥居にして東西廊は瑞籬なりしが、高倉天皇治承二年播磨宿禰光親といふもの此を改造し同三年上棟せりといふを以て見れば此時の創立に非ざるか。今樓門上の重梁に「慶長十八年云々」の墨書あり、樣式手法材料亦此時の改造と見るを至當とす、左右廊亦然り創立以來此時に至る迄は二十箇年毎に本社と共に造營をなせりといふ。此樓門を入れば本殿あり四神殿より成る。

法華寺本堂。

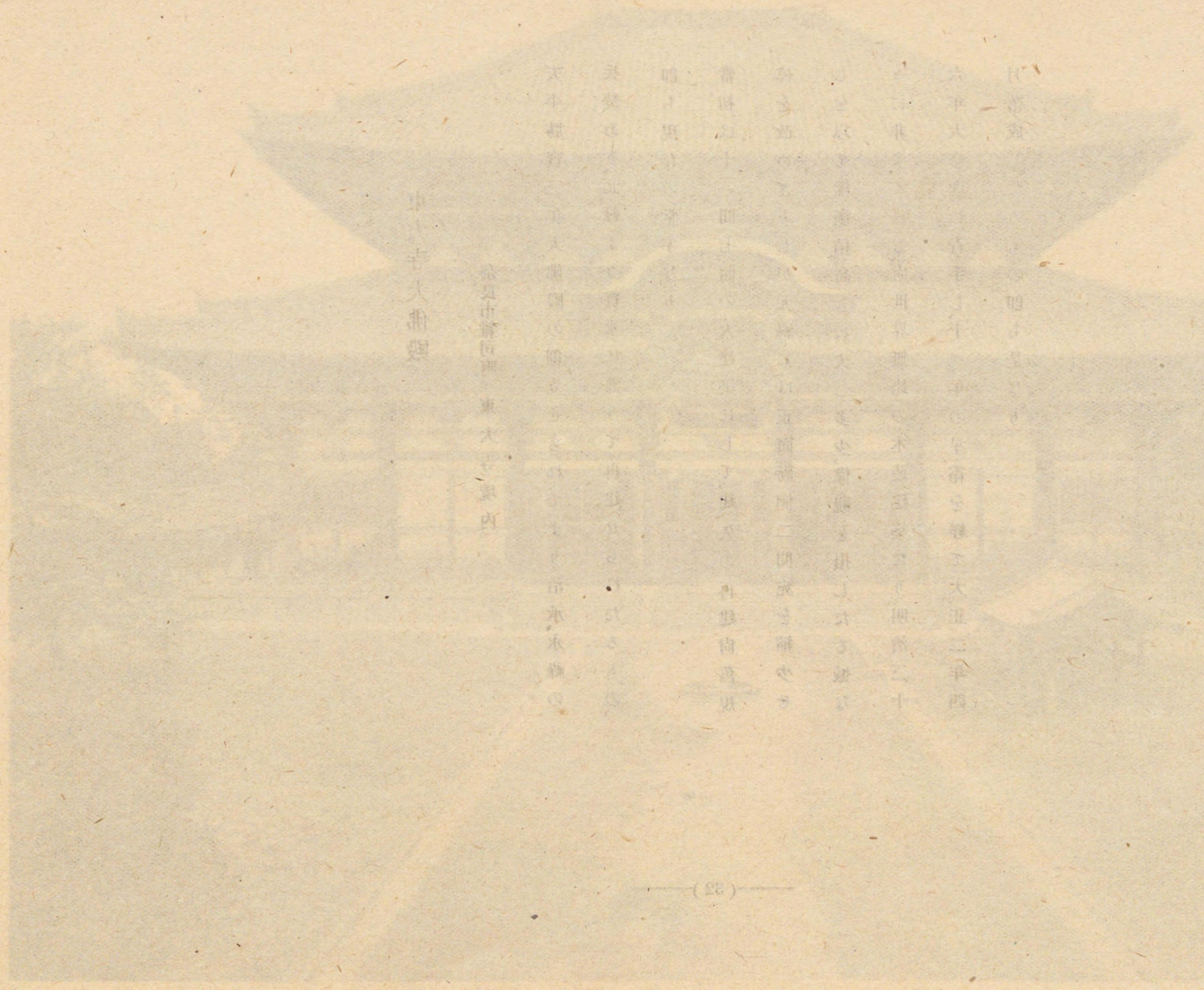
添上郡佐保村大字法華寺　法華寺境内。

寺地は元と藤原不比等の邸宅たりしを光明皇后天平十三年先帝及老妣の冥福を祈らんが爲めに喜捨して寺を建て法華滅罪寺と號したり。今の本堂は元講堂にして慶長六年豐臣秀頼片桐且元に命じて舊金堂の殘木を以て造營せしものといふ。内部の佛壇及厨子は黒漆塗にして鍍金の飾金具を打ち善美を盡せるものなり。

吉野水分神社社殿。

吉野郡吉野村大字吉野山　吉野水分神社境内。

祭神は天水分神にして他に六座の神を配祀せり。鎭座の年代未詳なるも　文武天皇の御宇既に社殿の存せし事は續日本紀に見ねたり。延喜の制大社に列せられしが。其の後の沿革明らかならず、應長五年豊臣秀頼建部内匠頭を奉行として造營せしもの卽ち現在の社殿にして、柱楹枓栱隨所極彩色塗金の金具を以て裝飾せる壯麗なる建築なり。

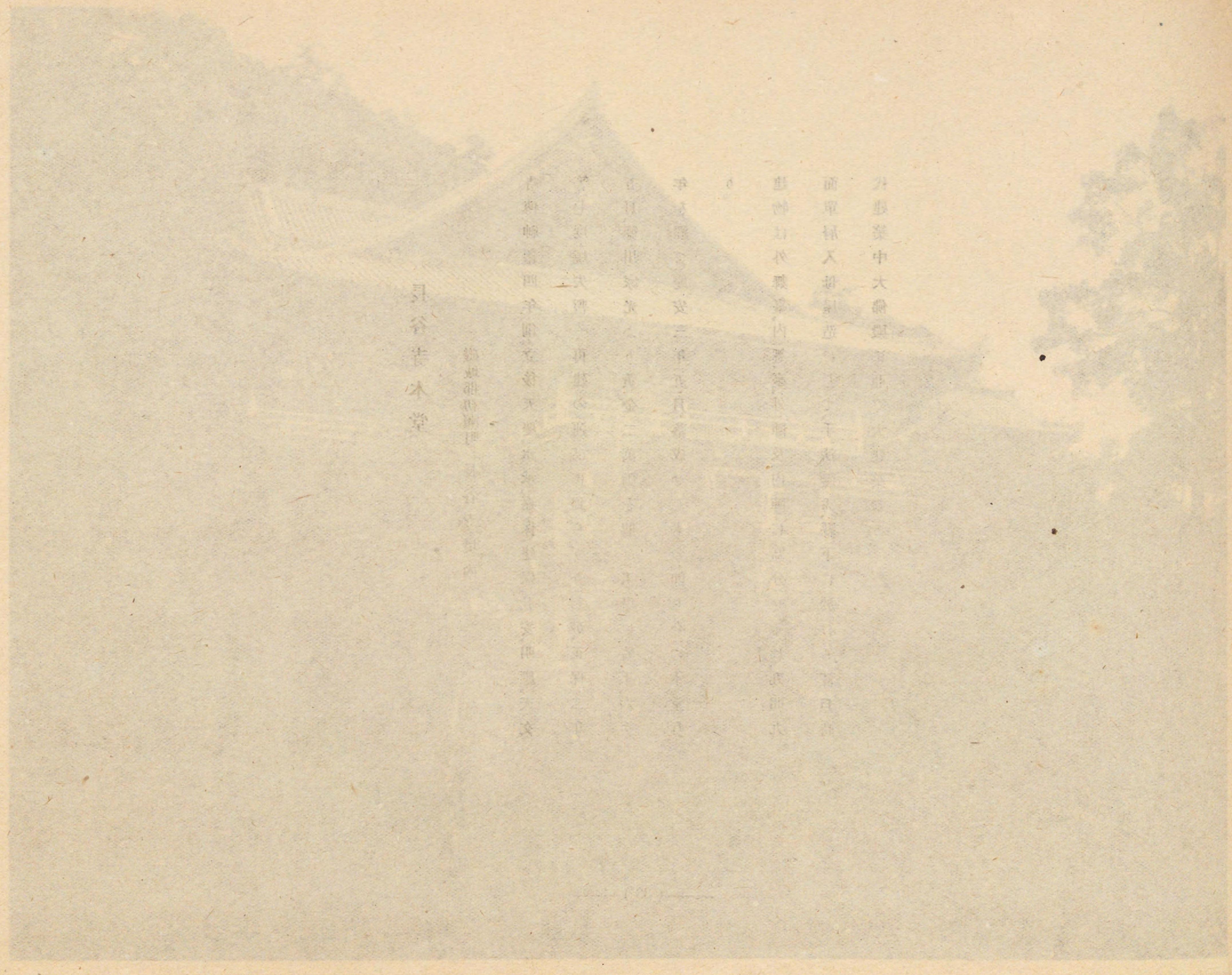


東大寺大佛殿。

奈良市雜司町　東大寺境内。

天平勝寶三年大佛殿の創立せられてより治承、永祿の兵燹あり、元祿より寶永に渡りて再建せられたるもの、卽ち現存の堂宇なり。

當初は十一間七面の大建築にして、建久の再建尙舊規模を改めざりしが元祿には正面両側二間宛を縮少せしを以て權衡稍高きに失し多少、偉觀を損したる憾なきに非ずと雖も、尙世界無比の木造建築たり。明治三十六年大修理に着手し、十ヶ年の星霜を經て大正二年四月落成したるもの卽ち是なり。

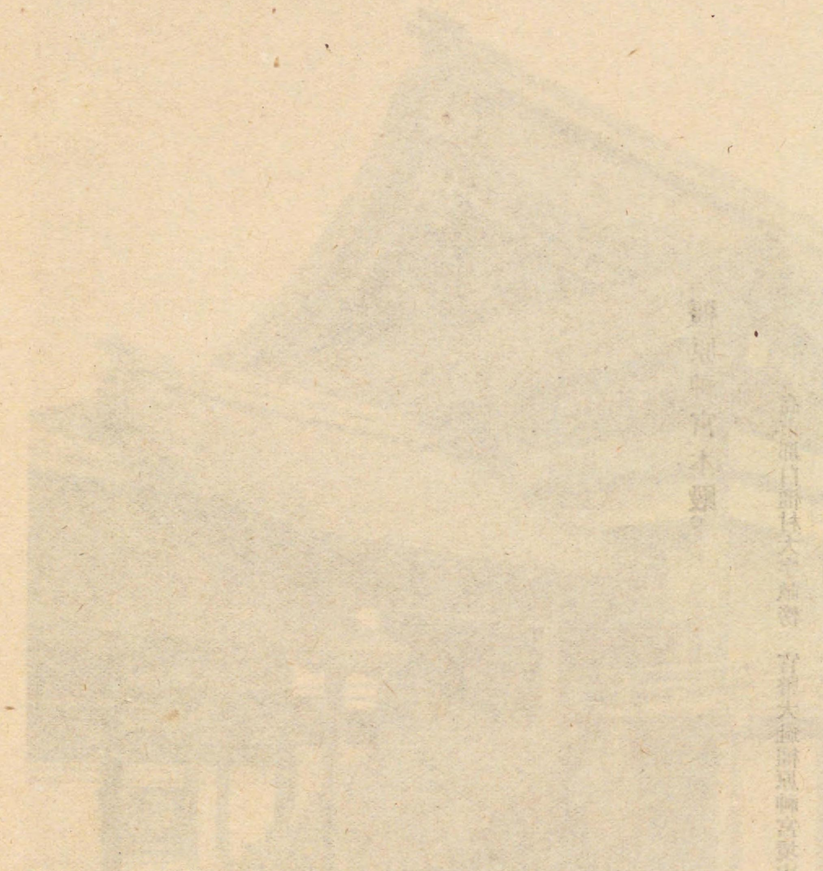


長谷寺本堂。

磯城郡初瀬町　長谷寺境内。

寺傳神龜四年創立後天慶、永承、嘉保、建保、弘安、明應、天文等七度燒失暫く再建の運びに到らざりしが、正保二年五月、德川家光より黃金二萬両を賜ひ工事に着手、六ヶ年を經て慶安三年五月落成せしもの卽ち今の本堂なり。

建物は外舞臺、內舞臺、外陣及內陣に區分せられ、九間九面單層入母屋造にして、手法優秀、縣下に於ける江戸時代建築中大佛殿に亞ぐ大建築なり。



橿原神宮本殿。

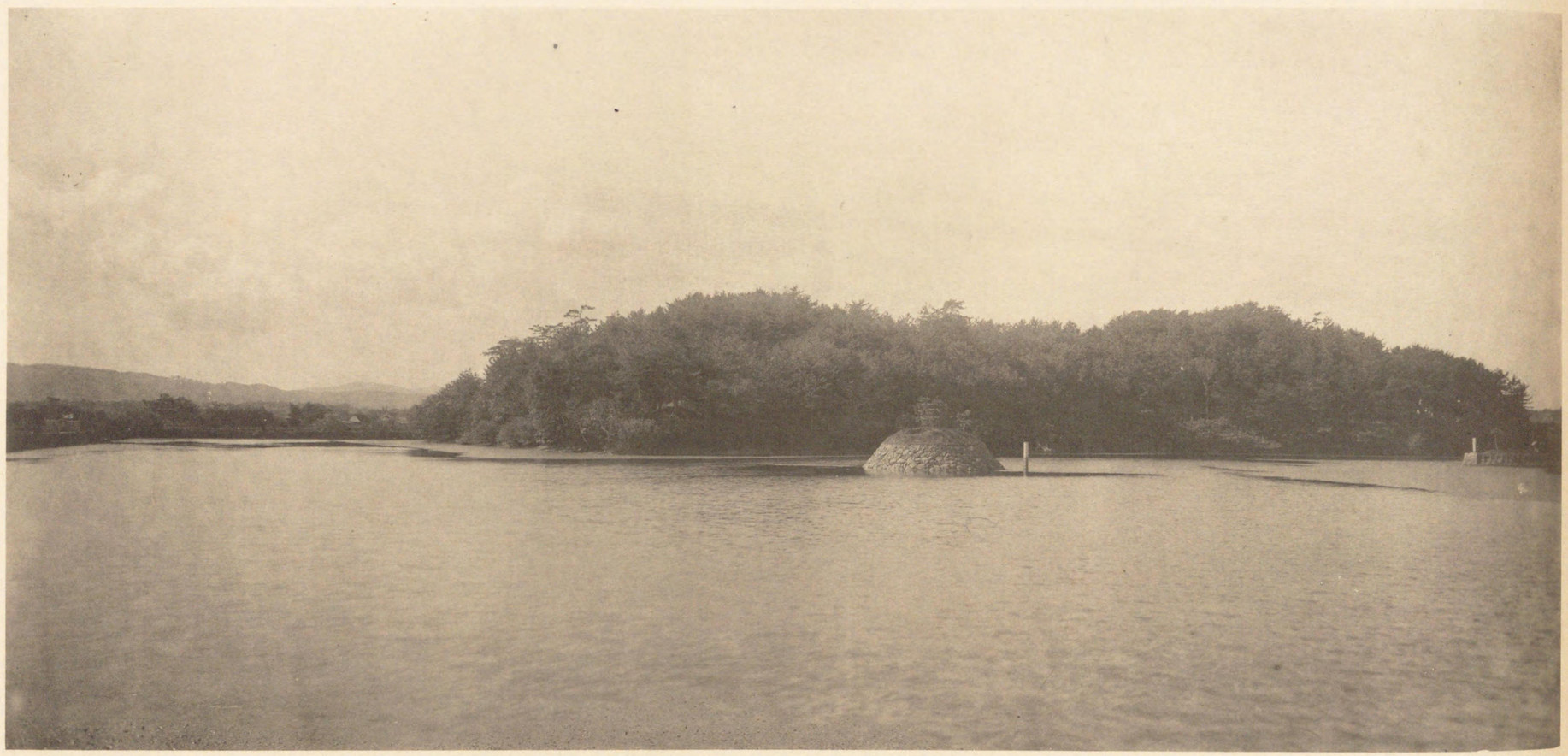
高市郡白橿村大字畝傍　官幣大社橿原神宮境内。

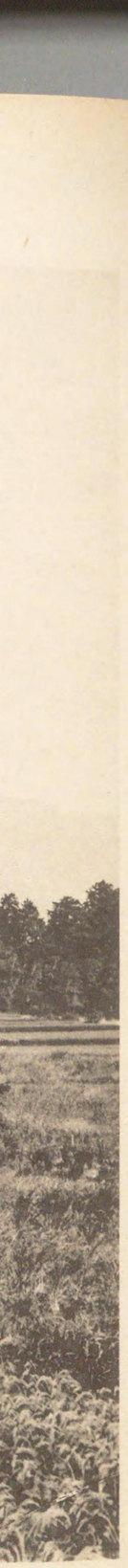
明治二十二年八月畝傍山の東南に皇祖登極の靈地を相して橿原神宮を創立し　神武天皇と皇后媛踏鞴五十鈴媛とを祀り給ふ。本殿は安政二年に造營したる京都內裏中の內侍所を此處に移したるものにして遠望の山は卽ち畝傍の瑞山なり。

垂仁天皇菅原伏見東陵。

生駒郡郡跡村大字尼ケ辻

我國古代の陵制　開化天皇に至りて一變し前方後圓の瓢形墳となりて繞らすに濠を以てす。此陵最も其形式の完全となれるものにして周圍五百二十三間あり。前方に見ゆる小島は　垂仁天皇の勅命により橘を常世國に求めし田道間守の墳墓なり。





平城宮址。

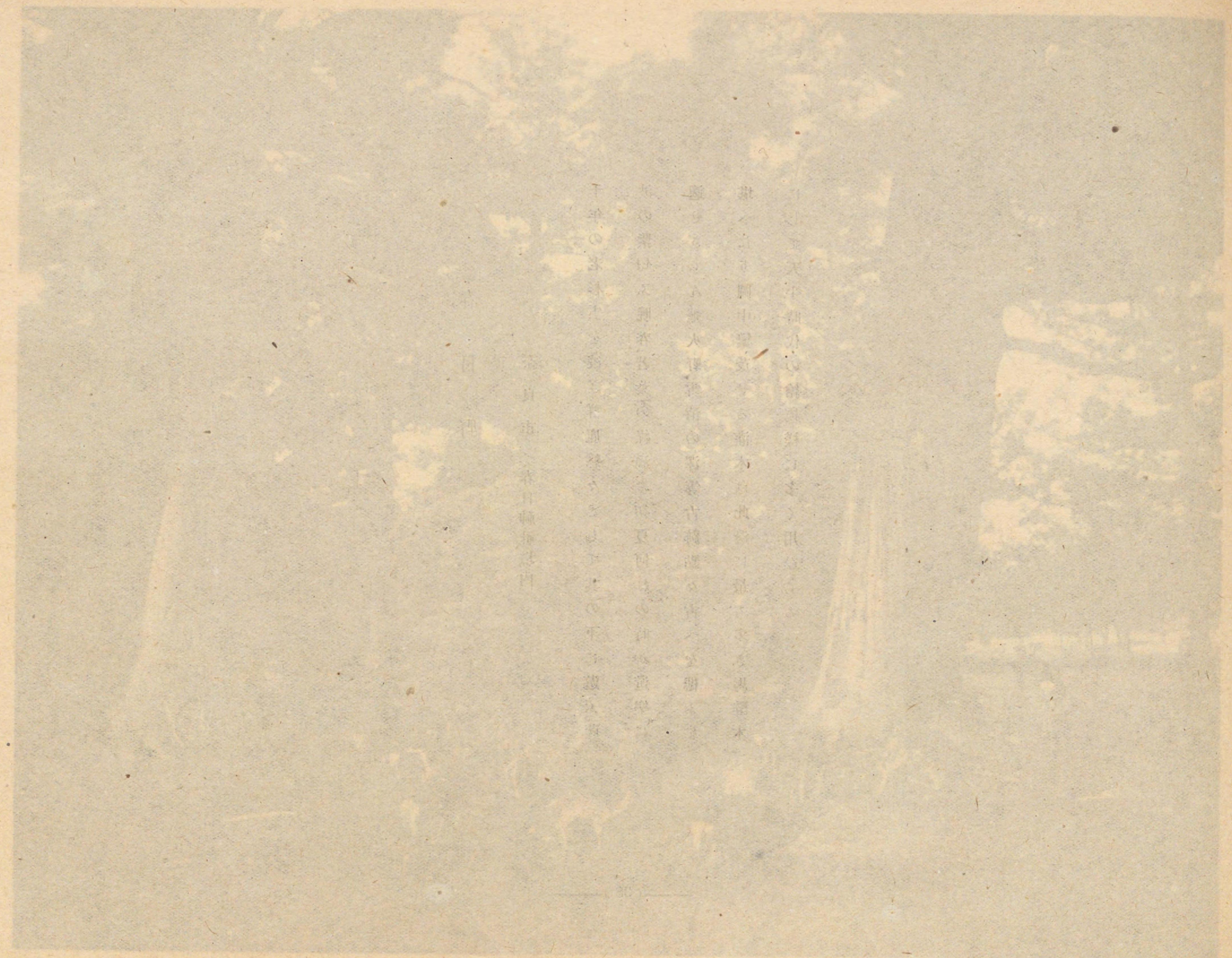
生駒郡都跡村大字佐紀

平城宮址は奈良市の西十八町にあり。大極殿を始め十二堂歩廊の址等芝生となりて田圃の間に點々するを指摘すべし。平安遷都の後幾くもなくして廢墟となりしも風雨千年農民敢て之を犯さず以て今日に至れり。今や平城宮址保存會設立せられ既に土地の買收を了し之が表示の方法に着手しつゝあり。

春日燈籠。

奈良市　春日神社境内。

老木鬱として深巌の氣人に迫る處身の人寰に在るを覺ねざらしむ。路傍石燈籠數千並々列々蒼苔掬すべし、節分の夜盡く火を點す、最も美觀なり。圖は本社の樓門より若宮の方面を眺めたるもの、燈籠は御間形（オアヒガタ）と稱するものなり。



春日野。

奈良市　春日神社境内。

千年の老杉雲を凌ぎ群鹿悠々として其の下に遊ぶ。藤波の紫匂ふ晩春、若葉の綠滴る初夏何れの時か遊樂に適せざらん。飛火野、雪消の澤等古跡點々古へを偲ぶに堪へたり。圖中繁茂せる灌木は此邊に最も多き馬酔木にして天平時代の繪模樣に多く用ひらる。

嫩草山。

奈良市　奈良公園内。

撮影せるものゝ中正面の圓山は卽ち嫩草山にして曾て東大寺興福寺の境界に方りて所屬の爭よりこれを燒き拂ひしことありしより已來春毎に之を燒くを例とす。全山の青芝氈の如く春日山と反照して一段の景趣を添ふ、前面の廣場は運動場なり。

瀧阪。

奈良市　奈良公園。

奈良市高畑より春日山の南麓を繞り奈良山中に通ずる道に瀧阪あり、溪流潺湲洄する所楓樹枝を交へ霜に飽くの晩秋に於て景趣最も可なり。路傍壁立せる岩石には佛像を刻し亦探古の清興を縦にするに足る。

月瀬。

添上郡月瀬村。

山陽曾て曰く和州の香世界を觀るに非ずんば此生何ぞ梅花を說くべけんやと。蓋し至言と言ふべし、此地自ら三區に分る、月瀬、尾山、桃香野是なり。殘雪未だ消えず、春月影朧なる處飄として羅浮仙と共に遊ぶの思ひあり。

龍田川。

生駒郡龍田町。

古の歌枕として名高かりし龍田川は、大和川の舊名なりといふ。今の龍田川は斑鳩の地を流るゝ大和川の支流にして、元と平群川と稱せしが、近世こゝに楓樹を植ゑて、雅客を待つに至りて、龍田川と稱することゝなりぬ。蓋し古の龍田の名をだに忍ばしめんとてなり。

橋畔老樹多く、兩岸の風光凡ならずとせず、今縣下の一勝區たり。

信貴山。

生駒郡平群村大字信貴畑。

生駒山脈の南に連りて信貴山あり。山に據りて朝護孫子寺を建つ聖德太子勝軍を祈らんが爲めに創建する所本尊は多門天なり傳へ言ふ楠氏の母此山に祈りて正成を生むと。戰國の頃松永久秀山上に城きしが織田氏の爲に攻陷せられ堂宇兵燹に罹る、慶長年中豐臣秀賴これを再建せり、今や仰詣の人踵を接し堂塔伽藍輪奐の美を極め寺門最も繁榮せり。

三　輪　山。

磯城郡三輪町。

三輪山一名三諸山と云ふ、全山悉く大神神社の境内にして、神體山と稱す、神社の建物は山麓にあり倭大物主櫛甕玉命を祀る、上古は神殿ありしが如きも中世以降本殿なし、此社は諸神社中最も舊き神社にして、延喜の制、名神大社に列し祈年、月次、相嘗、新嘗の官幣に預る、又二十二社の一にして本國の一宮と稱す、現今官幣大社たり。此圖は三輪山の西南を遠望せるものにして神社は其の左端にあり、山麓を繞れる市街は卽ち三輪町にして右方は金屋なり、此地は往昔物品交易の市場として有名なる海柘榴市の舊蹟なり。

初瀬。

磯城郡初瀬町。

初瀬は長谷寺觀音を以て其名高し。化粧坂より北面すれば上方に本堂及舞臺を仰ぐべく百八の步廊三折して長さ百九間斜に樓門に達す。廊の左右多く牡丹を植う。花時觀賞の客多し。

多武峯。

磯城郡多武峯村。

多武峯は藤原鎌足を祀れる別格官幣社談山神社のある處なり。山高く谷遠く邃々たる幽境を占めて朱樓碧殿壯麗を極め關西日光の稱あり。

大和三山。

畝傍山（高市郡白橿村）　香久山（磯城郡香久山村）
耳成山（磯城郡耳成村）

亘々たる大和平野中に三山の鼎立するあり。一を天香久山といふ、圖の左方に長く尾を引けるもの是なり。其後ろに見ゆるは畝傍の瑞山にして耳成山其右方に孤立す、三山略々山容を同ふして神韻縹緲そゞろに古へを偲ばしむ、今何れも帝室の御料地たり。

吉野皇居趾。

吉野郡吉野村。

後醍醐天皇吉野に幸したまふや、先づ吉水院に入り後ち金輪王寺を行宮となしたまふ。地は藏王堂の西山嘴の突角平なること數百歩の所に在り。

後名を實城寺と改めしが明治維新後廢墟となれり、南帝の遺物は移りて現に吉水神社にあり。吉野朝廷五十餘年春更くる所落花今尙當年を語る誰れか今昔の感に堪へんや。